

美 伝統の手技

第二十五回

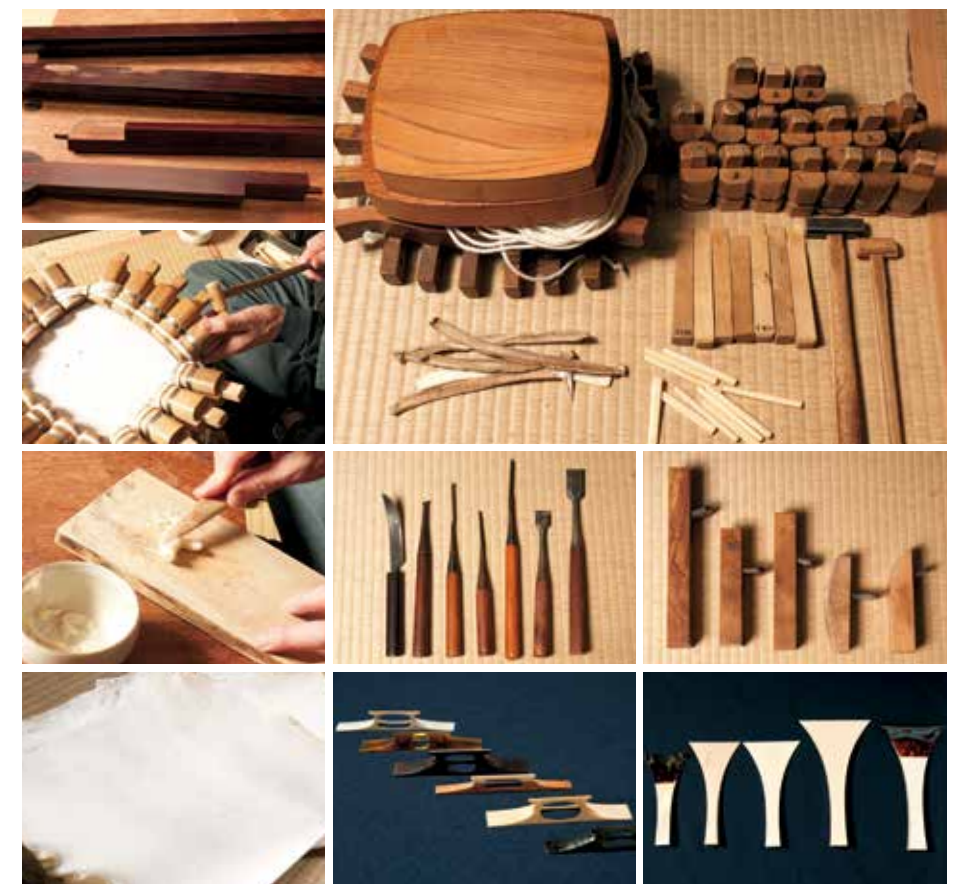
江戸に独自の発展を遂げた三味線。その伝統の技を音に託して作り続ける芝崎勇二さん。

三味線は中国の三弦に始まり、琉球の三線を経て上方・江戸へ伝わる。それが文楽・浄瑠璃から歌舞伎へとつながり、独自の楽器として、日本の歌舞音楽になくはならない伝統音楽となっていった。

左から、太棹、中棹、細棹。一般的には義太夫や津軽三味線が太棹、常磐津節や民謡・地歌が中棹、そして長唄が細棹と大別されるが、これはあくまでも目安のこと。三味線職人は音楽ジャンルだけでなく、弾き手の体格や体力、技量などを総合的に判断し、その人に合った三味線を作っていく。



使い手の望む音をいかに作れるかが三味線職人の心意気だ。



①		⑤	
②			
③	⑥	⑦	
④	⑧	⑨	

①三味線の棹に使用されるのは紅木、紫檀など。江戸時代には樺や桤などが使われることもあったが、現在は硬く、音の響きがいい紅木などが主流になった。②湿らせた皮を張り台の上に乗せ、木栓と呼ばれる洗濯ばさみのようなものをかませながら、少しずつ引っ張っていく。この引っ張り具合で、三味線の音が微妙に変化する。③皮を張るために使用するのは、もち米を原料にした糊。これは胴を傷つけないためだ。④皮の素材として使用されている猫の皮。津軽三味線は犬皮、長唄三味線は猫皮を使うのが一般的だ。⑤道具各種。左上から時計回りで、張り台、木栓、木槌、金槌、くさび、もじり、力皮。⑥鑿各種。大半の鑿は職人自らが作る。⑦鉤各種。扱う木が硬いので、それぞれの刃が立っているのが特徴。⑧胸各種。上から、長唄用、地歌用、小唄用、津軽三味線用、清元用、練習用。⑨撥各種。左から津軽三味線用、長唄用の木撥、長唄用象牙撥、生田流地歌用津山撥、生田流地歌用鼈甲撥。

三味線は江戸のロックだった――『江戸の音』（河出書房新社）の中で、そんなユニークな説を唱えるのが、江戸文化研究者として知られる田中優子氏（法政大学社会学部教授）だ。

たとえば、歌舞伎の『勧進帳』。これは能の『安宅』をベースにしたものだが、舞台に能の空間とはまったく異なる、目の覚めるような鮮やかな音と光を合体。同氏いわく、クラシックの室内音楽をやっているところで急にロックバンドが演奏を始めるような感じ。で、三味線の奏でる音には西洋的「音楽」の枠に入りきらない表現力があり、この音こそ「江戸時代の文化にとって決定的な音だった」と説く。なるほど、1950年代に黒人のブルースをルートとして生まれたロックも、クラシックやジャズ、ゴスペルといった当時の音楽シーンにおいては、音楽の枠に収まらないインパクトがあっただろうし、その後のポップカルチャー全体に多大な影響を与えたという意味では、三味線＝江戸の

ロック、という解釈も頷けなくはない。

三味線は中国の三弦が琉球に伝わり琉球三線となり、それが当時貿易港として栄えた大坂・堺港に伝わったのが16世紀半ば、元禄年間頃だ。

最初に手にしたのは琵琶法師たちで、琵琶を三味線に持ち替えた彼らが改良を重ね、三味線を誕生させていったといわれる。そして江戸時代に入ると、人形と結びついて浄瑠璃が生まれ、また歌舞伎の音楽として長唄、常磐津、清元などが誕生するなど、三味線は瞬く間に江戸庶民の間で広がりを見せていくのだ。

幕末の大老・井伊直弼ゆかりの名刹である世田谷区豪徳寺のほど近くに、三味線職人、芝崎勇二さんの店舗兼工房はある。

芝崎さんは大田区で三味線の製作・販売を手がける「亀屋」の次男として生まれた。当時、父親が店を構える大森海岸周辺には有数の花柳界があり、「忙しい父親に代わって、よく糸

なんかを配達させられたんですが、艶やかな芸者衆から「ごころうさま」と声をかけられるたび、胸がドキドキしたものですよ」

ところが、芝崎さんが中学2年のとき、父が他界。大黒柱を失った一家にのしかかったのが、明日からの生活」という現実だった。「兄が18歳で私が14歳。なんとか母と兄で暖簾だけは守っていくことになったんですが、生活は苦しくなる一方。そこで私は中学校の卒業を待つて旗の台（品川区）の叔父のもとへ住み込みの修業に出されることになったんです」

芝崎さん、16歳。親戚とはいえ、そこは職人の世界だ。むろん甘えなど一切ない。「三味線は皮を張って、はじめて木工芸品から楽器へと生まれ変わります。つまり、皮の張り方ひとつで音色が80%くらい決まってしまうんです。ところが、昔の職人ですら仕事は見て覚える！という具合で一切教えてくれない。で、出来上がったものを親方に見せると「ダメ」と破かれちゃう。その繰り返しでしたね」

ようやく仕事を覚え、芝崎さんが大森の実家に戻ったのが7年後、22歳のことだった。

時代は、東京オリンピックを控え、日本中が沸き立つ昭和30年代後半。そんな中で起こったのが民謡ブームだった。三味線はその手軽さも手伝い一気に需要が拡大。「大森の店が順調だったこともあって、気持ちの中に独立心が芽生えましてね。それで、結婚を期に妻が生まれ育った世田谷の小田急線沿線に絞って店を探し、豪徳寺に工房兼店舗を構えることになったんです」

ところが、表通りに三味線・箏専門店の看板を掲げたものの、来客はほとんどなし。「私ら職人には、いい仕事さえしていれば必ずお客様はついてくれる、という思いがありましたからね。でも実際問題、仕事はなければ食べていきません。そこで妻に店番をたのんで、私は大森の店へ通いで働きに出る、という日々が続いたんです」

だが、商いとは正直なものだ。いい仕事さえしていれば必ず客

1939(昭和14)年、東京・大田区生まれ。母方の祖先が江戸時代に東海道品川宿で三味線の商いをはじめ、以来一族の間で家業として受け継がれる。中学2年の時、三味線職人の父親が他界。中学を卒業後、実家を離れ、品川区旗の台にある叔父の店へ住み込み修業。7年後、大田区の実家に戻り、母子3人による新体制をスタートさせる。昭和43年、28歳での結婚を期に独立、世田谷区豪徳寺の住宅街の一角に工房兼店舗を開く。豪徳寺を選んだのは「商売敵になるので大田区と品川区だけはやめてほしい」という母親の意見を尊重してのことだった。平成8年2月、東京都伝統工芸士に認定。平成22年11月には、東京マイスターの称号が贈られる。後継者である長男・勇生さんは大学を卒業後、邦楽器店で10年間修業したあと、店に戻り現在は代表取締役として同店を切り盛りしている。



芝崎 勇二 Shibasaki Yuji
有限会社 亀屋邦楽器
東京都世田谷区豪徳寺2-30-10
TEL:03-3429-8389
<http://www.e-kameya.com>



右側が息子で後継者の勇生さん。大学を卒業後、10年の修業を経て父のもとへ。すでにこの道20年のベテラン職人だ。

サワリとは?

「一の糸」だけを上駒から外し、棹に直接するようにわずかな溝(サワリの谷)をこしらえることで、音色に味をつける仕組みを「サワリ」と呼ぶ。この工夫により、「一の糸」の開放弦を弾いた時や、「二の糸」「三の糸」で特定の場所を押さえた場合にも、音が共鳴し一種の躁音効果を生み出す。それが三味線に不可欠な独特の余韻となり、音に奥行きを作り出す。三味線に「サワリ」が用いられたのは17世紀末~18世紀はじめ頃。津軽三味線などには東サワリと呼ばれる特殊な装置が埋め込まれている。



一の糸の巻き取り部近くに「サワリ」という仕組みをこしらえることで、音に余韻が生まれる。写真上は「サワリ」がある現代の三味線、下は「サワリ」がついていなかった江戸時代のもの

当たり前前のごとを
当たり前前にやる。

がつく」という芝崎さんの仕事ぶりは徐々に口コミで広がり、同時に40年代半ばに復活した民謡ブームにより、三味線人気が再燃。

「玄人筋からの需要を考えたら、世田谷の住宅街に店を構えること自体、確かにハンデイクヤップはありました。でも、ブームの影響

で三味線が一般の家庭に入ってきたことで、それが逆にメリットになった。これも時代の流れなんだなあ、とつくづく感じたものです」



その後、昭和50年代中盤にはカラオケの台頭によって三味線市場全体が縮小していくことになるが、そんな逆風の中、亀屋は老舗の暖簾を守り続けてきた。

えれば、それができるようになってはじめて一人前の三味線職人と認められるのだとか。「一口に三味線と言っても、長唄、義太夫、常磐津……とそれぞれに特徴があり、義太夫なら太棹、長唄なら細棹という目安はあります。でも、三味線は弾き手の技量や体格、体力によって音色が変わるもの。だから我々は、長年の経験と勘でその「正解がない音」を弾き手が納得できる音にしていこうわけです。

そういう意味ではここでお終い、というところがない。ま、生涯を通して勉強が必要、というところですね」

芝崎さんにお話を伺いながら、ふと以前、歌舞伎座で見た、『仮名手本忠臣蔵』の舞台を思い出した。

切腹の座へと無念の一步を踏み出す塩冶判官。そして主君を失った悲しみと仇討ちの決意とを胸に、花道を去る大星由良之助の背後に三味線の音がかぶさる。

ところで、三味線作りの原点は、使い手が望む音をいかに作れるようになるかだといわれる。言い換

その音に宿るのは、あるいは江戸庶民たちの心の叫び……なるほど、ロックなのかもしれない。

